

令和 4 年 1 月 31 日現在

機関番号：33941

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26861959

研究課題名（和文）訪問看護ステーションによる精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況

研究課題名（英文）Implementation status of psychiatric visit nursing by multiple staff at visiting nursing station

研究代表者

初田 真人（HATSUDA, Masato）

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師

研究者番号：70512656

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：訪問看護ステーションによる精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況を明らかにした。

アンケート調査は全国の訪問看護ステーションを対象として実施し、精神科訪問看護の実施率は41.0%、精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施率は7.3%であった。複数名訪問による濃厚なケアが利用者の地域生活を支え、訪問看護師の安全確保や訪問看護技術の継承につながることが考えられた。さらに、非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関するインタビュー調査から、非専門職の‘普通の人’として看護補助者が利用者に関わることで、看護補助者の強みを活用した関係の構築と利用者の満足につながることが考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、複数名による精神科訪問看護の実施状況およびその実施目的と効果が明らかとなった。研究結果から、複数名訪問による濃厚なケアが利用者の地域生活を支え、訪問看護師の安全確保や訪問看護技術の継承につながることで、その中でも専門職者だけでなく非専門職者が同行して利用者に関わることにより多様なケアを提供できることが考えられ、複数名による訪問看護は精神障害者の地域生活支援として有用であることが示された。

研究成果の概要（英文）：We clarified the implementation status of psychiatric visit nursing by multiple visiting staff at visiting nursing station.

We conducted a questionnaire survey throughout the nursing station in Japan. The implementation rate of psychiatric visit nursing at 1,721 visiting nursing stations in Japan was 41.0%, and the implementation rate of psychiatric visit nursing by multiple visiting staff was 7.3%. It was thought that rich care with multiple visiting staff supported the life of users, securing the safety of visiting nurses and inheriting the visiting nursing skills.

In addition, we conducted an interview survey on the psychiatric visit nursing provided by nurses accompanied by non-professional nursing assistants. Non-professional nursing assistants involved with users as 'ordinary people', which led to the establishment of relationships utilizing the strengths of non-professional nursing assistants and the satisfaction of users through diverse relationships.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神科訪問看護 複数名訪問看護 訪問看護ステーション 多職種連携 看護補助者

1. 研究開始当初の背景

わが国の精神科医療は、1990年代以降、入院中心の医療から地域生活を中心とした医療へと変換しつつある。地域生活を送る精神障害者への支援として精神科訪問看護の有用性が示されており、平成24年度の診療報酬改定では、精神科訪問看護の対象が入院中以外の患者と家族に拡大され、平成26年度の改定においても、精神科複数回訪問加算が新設されている。精神科訪問看護は、精神科を標榜する保険医療機関、訪問看護ステーションにおいて提供されている。これまでは、精神科医療機関による訪問看護に対する制度上の拡充がなされてきた。一方で、社会復帰施設に入所中の精神障害者への訪問看護、複数名による訪問看護への評価等、訪問看護ステーションによる精神科訪問看護に対する評価は遅れている現状である。訪問看護ステーションによる訪問看護は、精神症状がある程度安定しており長期間の生活支援の必要なケースが多く、精神障害者の地域生活を支えるうえで有用であることが示されている。精神科訪問看護の実践を担う訪問看護ステーションはいまだに多くはなく、その推進が求められている。

訪問看護ステーションによる訪問看護では、複数名訪問看護は診療報酬上評価されていなかった。そのため、全国訪問看護事業協会(2008)において、同行訪問の実施率が調査されているが、病院の45.1%に対して、訪問看護ステーションは6.0%にとどまっていた。複数名訪問看護は、精神科に特化していない一般の訪問看護ステーションにおいて特に診療報酬上の評価の要望が多かった。一般の訪問看護ステーションの看護師にとっては単独訪問に対する不安や恐怖心が精神科訪問看護を実施するうえでの妨げとなっていると考えられていた。

平成22年度の診療報酬改定において、訪問看護ステーションによる訪問看護においても、利用者の身体的状況や暴力・迷惑行為を理由として複数の看護職員で訪問看護を行っている実態があることを踏まえ、看護の困難事例等に対して保健師または看護師と看護職員等が複数名で行う訪問看護の評価が新設された。その後、平成24年度改定においては、同行する職員の対象職種として精神保健福祉士および看護補助者が追加されている。このように複数名訪問看護の対象職種が拡大している背景として、訪問看護のニーズが多様化しており、増加する需要や多様なニーズに対応することが求められていることがあげられる。

対象として追加された看護補助者に関しては、訪問看護を担当する看護師の指導の下に、療養生活上の世話のほか、居室内の環境整備、看護用品および消耗品の整理整頓等といった看護業務の補助を行う者が想定されている。

診療報酬化された後の複数名訪問看護の

実施状況に関しては、厚生労働省により平成24年度診療報酬改定結果検証に係る特別調査において一部調査が行われているものの、訪問看護の実施目的やその効果等に関して詳細には明らかにされていない。複数名訪問看護の現時点での実施状況を調査することにより、精神科訪問看護の拡大状況を把握し、複数名訪問看護の診療報酬上の評価による効果と課題を明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

訪問看護ステーションによる精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況を明らかにすることである。第一段階として、訪問看護ステーションへのアンケート調査により複数名による精神科訪問看護の実施状況を把握した。第二段階として、精神科訪問看護に関する訪問看護師、非専門職者および訪問看護利用者へのインタビュー調査により非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する認識を明らかにした。

3. 研究の方法

(1) 訪問看護ステーションを対象とした複数名による精神科訪問看護の実施状況に関するアンケート調査

アンケート調査の方法

「精神科訪問看護実施の有無」、「複数名による精神科訪問看護実施の有無」、「複数名による精神科訪問看護の同行職員の職種」、「複数名による精神科訪問看護の実施目的」、「複数名による精神科訪問看護の実施による効果」の5項目を含む記名式のアンケート調査票を独自に作成し、データ収集開始時に一般社団法人全国訪問看護事業協会のホームページに正会員として掲載されていた全国の訪問看護ステーションを調査票の送付先とした。訪問看護ステーションの管理者1名に、研究参加への同意が得られる場合は、アンケート調査票に回答の上、研究者へ郵便にて返送することを依頼した。

データ収集期間

平成28年1月～平成28年4月

データ分析方法

返送されたアンケート調査票への回答から得られた量的データは、記述統計にて分析を行った。また、複数名による精神科訪問看護の実施目的と効果の自由記載については、テキストデータに変換した後、「実施目的」と「実施による効果」のそれぞれについて、一つのまとまりをもった意味で区切り、コードを作成した。意味内容の類似性に基づいてコードを分類し、サブカテゴリーを生成、さらに同様の方法を繰り返し、カテゴリーを生成した。カテゴリー化した後、カテゴリーに含まれるコード数を数えた。

研究の妥当性の確保

アンケート調査票の作成、データ収集およびデータ分析の各過程において、精神科訪問看護および看護研究に精通する専門家2名に意見を求めた。専門家から得られた意見に基づいて、量的データおよび自由記載の質的データから得られた結果を精練し、研究の厳密性を高めた。

倫理的配慮

本研究は、研究開始前に日本赤十字豊田看護大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号2707）を得て行った。アンケート調査票に研究の趣旨および研究への参加・協力の自由意思の保障を明示し、調査票の返送をもって同意を確認した。

- (2) 訪問看護師、非専門職者および訪問看護利用者を対象とした非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する認識についてのインタビュー調査

研究参加者の選定

便宜的サンプリングにて、医療・福祉の専門職者ではない非専門職の看護補助者（非専門職者とする）が同行する複数名による精神科訪問看護を実施している訪問看護ステーションを選定した。研究参加者は、訪問看護ステーションの訪問看護師、その訪問看護師と同行訪問を行う非専門職者、およびその訪問看護師と非専門職者が行う訪問看護の利用者とし、すべての者から研究参加への同意が得られた場合に研究参加者とした。

なお、訪問看護の利用者は以下のア～ウの選定条件をすべて満たし、本人および代諾者の同意が得られている者とした。

- ア 精神疾患の診断後、治療を開始してから1年以上経過している。
イ 主治医もしくは訪問看護ステーションの管理者等により、病状が安定しており、インタビューを行うことにより病状に悪影響を及ぼさないと判断されている。
ウ 研究の趣旨を理解し、自分の意思を言語により表現できる。

データ収集期間

平成29年11月～平成30年3月

データ収集方法

訪問看護師、非専門職者および利用者に対する半構成的面接をインタビューガイドに基づいて個別に行った。

訪問看護師、非専門職者および利用者に対するインタビュー内容は、それぞれ属性に関する質問、「複数名による訪問看護実施時の各職種によるケア内容」および「複数名による訪問看護実施時の職種による相違」、「訪問看護師による単独訪問時のケア内容」および「複数名による訪問看護実施時と訪問看護師による単独訪問時のケア内容の相違」とし

た。訪問看護師および非専門職者に対しては、「複数名による訪問看護実施時の利用者の反応（影響や効果）」、「複数名による訪問看護の実施に伴う自らの関わりおよび利用者に対する思いの変化」を追加し、利用者に対しては、「複数名による訪問看護による影響もしくは効果と利用者としての思い」、「複数名による訪問看護への今後の期待」を追加した。

データ分析方法

インタビューによって得られたデータを逐語録に起こした後、研究参加者の訪問看護師、非専門職者および利用者のそれぞれが認識している「非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する認識」を表す内容について、一つのみとまりをもった意味で区切り、ラベルを作成した。意味内容の類似性に基づいてラベルを分類し、次のレベルのラベルを作成することを繰り返すことにより質的に分析した。次に、訪問看護師、非専門職者および利用者のそれぞれについて、最終ラベルの意味を示すテーマを抽出し、抽出したすべてのテーマの関連を検討した。

研究の厳密性（信頼性、妥当性）の確保
カテゴリー化およびカテゴリー間の共通点、相違点について、精神科訪問看護および看護研究に精通する専門家に意見を求めた。専門家から得られた意見に基づいて、結果を精練し、研究の厳密性を高めた。

倫理的配慮

本研究は、研究開始前に日本赤十字豊田看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号2906）。研究参加候補者に、研究の趣旨、研究参加により期待される利益および研究に伴う不快、不自由、不利益、リスク等を口頭・書面を用いて分かりやすく説明し、研究への参加・協力は参加者の自由意思であることを保障した上で、研究参加への同意を文書で確認した。利用者の研究参加にあたっては、代諾者（家族等）の同意をあわせて確認した。

4. 研究成果

- (1) 訪問看護ステーションを対象とした複数名による精神科訪問看護の実施状況に関するアンケート調査

精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況

一般社団法人全国訪問看護事業協会のホームページに正会員として掲載されていた全国の訪問看護ステーション4,724箇所を調査票を送付し、1,737箇所のステーションの管理者から回答があった（回収率36.8%）。そのうち、不適当な回答のある調査票を除いた1,721を有効回答とした（有効回答率36.4%）。

精神科訪問看護を実施している訪問看護ステーションは705箇所(全国のステーションにおける実施率41.0%)で、過去に実施したことのあるステーションは98箇所(同5.7%)であった。

複数名による精神科訪問看護は126箇所で開催しており、全国の訪問看護ステーション1,721箇所のうち7.3%、精神科訪問看護を実施しているステーション705箇所のうち17.8%であった。職種に関しては、看護職者のみ(保健師または看護師2名もしくは保健師または看護師と准看護師)の複数名訪問は71箇所(複数名による精神科訪問看護を実施しているステーションのうち56.3%)であった。看護職者以外の職員との複数名訪問は55箇所(同43.7%)であり、そのうち、看護補助者との同行訪問を実施しているステーションは24箇所(同19.0%)であった。

複数名による精神科訪問看護の実施目的と効果

複数名による精神科訪問看護を実施している126箇所のステーションのうち、回答があった123箇所の複数名による精神科訪問看護の実施目的と効果の自由記載について分析した。以下、【 】はカテゴリー、[]はカテゴリーに含まれるコード数を示す。

複数名による精神科訪問看護の実施目的として、表1に示す8カテゴリーが生成された。

管理者が認識する複数名による精神科訪問看護の実施による効果として、表2に示す7カテゴリーが生成された。

表1 複数名による精神科訪問看護の実施目的

【カテゴリー】[コード数]
1)【利用者の精神症状による言動や病状の急変などの不測の事態への対応】[55]
2)【複数の職員による対応力を活用した利用者への生活支援や家族支援の提供】[39]
3)【関係の行きづまりや困難が生じた利用者との対人関係の構築と拡大】[17]
4)【利用者の服薬管理や受診援助などの医療継続のための援助】[13]
5)【地域生活の継続を目指した多面的な社会資源への橋渡し】[25]
6)【利用者の精神症状により生じる突発的行動からの職員のリスク回避】[37]
7)【職員間の情報共有による多面的なアセスメントや看護ケアの質向上】[14]
8)【主治医の指示や退院前の入院形態、法人の方針など一定の方針に応じた訪問】[16]

表2 複数名による精神科訪問看護の実施による効果

【カテゴリー】[コード数]
1)【利用者の暴力行為や衝動行為の抑制と精神的安定】[46]

- | |
|--|
| 2)【職員の役割分担と多職種の専門性や能力の活用による多様なケアの提供】[43] |
| 3)【利用者の対人緊張の緩和による対人関係の構築・拡大と訪問看護の受け入れ】[43] |
| 4)【利用者の服薬や通院・入院による医療の継続】[8] |
| 5)【他の社会資源も活用し利用者は入院せずに地域生活を継続】[27] |
| 6)【職員の心理的負担の軽減と安心・安全な訪問看護】[45] |
| 7)【職員の冷静な対応と多面的な利用者の理解による看護ケアの質向上】[35] |

- (2) 訪問看護師、非専門職者および訪問看護利用者を対象とした非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する認識についてのインタビュー調査

研究参加者の概要

複数名による精神科訪問看護を実施している訪問看護ステーションのうち、非専門職者が同行訪問をしている2箇所のステーション(A, B)に勤務する訪問看護師2名と非専門職者2名、およびその訪問看護師および非専門職者が行う訪問看護の利用者2名から同意を得た。

非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する認識

非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師A1氏とB1氏の認識について、173のラベルが作成され、表3に示す8つのテーマが抽出された。以下、訪問看護師の認識のテーマを《 》で示す。

表3 非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師の認識

《訪問看護師の認識のテーマ》
1)《非専門職者の挫折経験から意思と力を育む地ならし》
2)《利用者の思いを人生や生活につなげるための見極め》
3)《非専門職者が存在する空間での既存の制度を越えた支援》
4)《支援チームの一員として濃厚なケアを役割分担》
5)《利用者が身近に感じ関心を抱く非専門職者の存在》
6)《支援者にとっての成長や継続への活力》
7)《複数名訪問による刺激で生じる精神的・経済的負担》
8)《非専門職者による同行訪問の弊害となる制度上の不備》

非専門職者A2氏とB2氏の認識について、164のラベルが作成され、表4に示す8つのテーマが抽出された。以下、非専門職者の認識のテーマを 《 》で示す。

表4 非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する非専門職者の認識

非専門職者の認識のテーマ
1) 振る舞いのさじ加減が困難
2) 仲間や隣人のような普通の人としての存在
3) 利用者の空気感のなかで精神状態の悪化を避ける関わり
4) 機会を見つけて他の支援者と情報交換
5) 普通の関わりから感じられる利用者にとっての敷居の低さ
6) 利用者への関わりから培える経験
7) 多様な人々との人間関係から感じられる精神的負担
8) 非専門職者による貢献を妨げる制度上の縛り

利用者A3氏とB3氏の認識について、18のラベルが作成され、表5に示す1つのテーマが抽出された。以下、利用者の認識のテーマを『 』で示す。

表5 非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する利用者の認識

『利用者の認識のテーマ』
1) 『明るい雰囲気のある場を共有できる普通の嬉しさ』

非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する認識の中心テーマ

非専門職者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師、非専門職者および利用者の認識のテーマについて、それらの関連を検討し、3つの中心テーマを抽出した。中心テーマを1)～3)で示す。

訪問看護師は《非専門職者による同行訪問の弊害となる制度上の不備》、非専門職者は非専門職者による貢献を妨げる制度上の縛りを認識しながらも、《非専門職者の挫折経験から意思と力を育む地ならし》や《利用者の思いを人生や生活につなげるための見極め》をして、1)縛りのあるなかでの土台づくり、をしている。

仲間や隣人のような普通の人としての存在である非専門職者であることを活かして《非専門職者が存在する空間での既存の制度を越えた支援》を行う一方、振る舞いのさじ加減が困難と感じながら利用者の空気感のなかで精神状態の悪化を避ける関わりや機会を見つけて他の支援者と情報交換、《支援チームの一員として濃厚なケアを役割分担》しており、非専門職者は、2)チーム員としての役割があるなかでの普通の人としての支援のさじ加減、を行っている。

非専門職者の同行訪問により、多様な人々との人間関係から感じられる精神的負

担、《複数名訪問による刺激で生じる精神的・経済的負担》があるものの、利用者には《利用者が身近に感じ関心を抱く非専門職者の存在》、普通の関わりから感じられる利用者にとっての敷居の低さ、『明るい雰囲気のある場を共有できる普通の嬉しさ』、支援者には利用者への関わりから培える経験、《支援者にとっての成長や継続への活力》となり、3)複数名訪問による負担があるなかでの普通の関わりの意義、がある。

(3) 訪問看護ステーションによる精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況に関する考察

複数名による精神科訪問看護の実施状況

アンケート調査の結果から、訪問看護ステーションにおける精神科訪問看護の実施率は41.0%であった。そのうち、複数名による精神科訪問看護の実施率は全体の7.3%であった。これは、診療報酬化以前に実施された調査結果である5.7%（全国訪問看護事業協会、2008）の約1.3倍となっており、診療報酬上の評価が実施率の上昇に寄与していることが考えられる。保健師または看護師の訪問に同行した職員の職種に関しては、複数名による精神科訪問看護を実施しているステーションのうち、看護職者のみで複数名訪問を実施した訪問看護ステーションが半数を超えているものの、看護職者以外の職員との複数名訪問も実施されており、非専門職者との同行訪問も実施されていた。このことから看護職者同士の複数名訪問が中心となる一方、多職種連携の状況がうかがえた。

複数名による精神科訪問看護の実施目的と実施による効果

複数名による精神科訪問看護の実施目的は、利用者への訪問看護のケア内容の拡大を目的としたものが多くみられた。そして、複数名でケアを実施することによる利用者への直接的な効果が管理者の認識から示された。対人関係に困難を抱える利用者や病状による不測の事態が想定される利用者、医療の継続が難しい利用者への対応といった精神障害者の特徴を踏まえたケアを複数名で実施することにより、同時に濃厚なケアが提供でき、利用者の地域生活を支えていると言える。

精神科訪問看護を実施する訪問看護ステーションの管理者は、訪問看護師の安全確保は自身の役割であると認識しており、管理上も複数名による訪問看護を実施する意義があると言える。一方で、複数名による訪問は利用者の対人緊張につながるリスクも考えられ、導入にあたっては慎重な検討が求められる。

訪問看護を提供する職員にとって、複数名での情報共有と多面的なアセスメントが看

護ケアの質向上につながると認識されている。同時に、精神科を専門としていない訪問看護師は、対象の捉えにくさによる不安があり、状況に応じた効果的対応方法を知ることがニーズとしてあげられており（渡邊・折山・國方他，2009）複数名訪問によりモデリング効果や訪問看護技術の習得が期待され、技術の継承につながることも考えられる。

非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師、非専門職者および利用者の認識

複数名による精神科訪問看護において、医療・福祉の専門職者ではない非専門職の看護補助者による訪問看護も実施されていた。そこで、本研究では、非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師、非専門職者および利用者の認識を明らかにした。

2) チーム員としての役割があるなかでの普通の人としての支援のさじ加減、として示されるように、地域で生活している統合失調症をもつ人は精神的な病気の有無ではなく人としてつきあえる人間関係を築くことを望んでおり、非専門職者の同行訪問はその希求に応えるものと言える。海外においても、精神障害をもつオランダのケアファームの利用者が普通の生活や社会とつながる通常の会話といったケアとは異なる環境の意義に言及しており（Hassink, Elings, Zweckhorst et al., 2010）地域生活を送る精神障害者に専門的な医療とあわせて‘普通’の環境を提供することも支援として有意義であると考えられる。

3) 複数名訪問による負担があるなかでの普通の関わりの意義、において、利用者との関係の障壁や利用者の負担となることがある一方で、利用者にとって非専門職者との関わりが身近に感じられ、支援者にとっても成長や活力となっている。他者との関わりは精神障害をもつ人の生活のひろがりに影響し、その影響力はプラスにもマイナスにも振れるという両側面を持っており、生活を広げていく際には重要な鍵になると言われている（笹木，2016）。1) 縛りのあるなかでの土台づくり、で明らかとなったように、訪問看護師は人として利用者に関われるように非専門職者を育みながら、非専門職者の同行訪問が利用者にとってどのような意義があるのかを見極めることが求められる。村瀬・村瀬（2020）は、成功と失敗は共存し、失敗から学びレジリエンスを発揮することが成功の秘訣であると述べている。この循環論的な考え方から、非専門職者が同行する精神科訪問看護によって利用者にネガティブな影響が生じた場合には、共存しているポジティブな要素を捉え、同行している訪問看護師が利用者の体験を意味づけることで、利用者にとって新たな発見につながる可能性がある。専門職者だけでなく非専門職者が訪問して

利用者に関わることにより、多様な視点が投入され、関わりに広がりや深まりが期待でき、利用者や援助者双方が新たな発見を得られる体験となることが考えられる。

文献

Hassink, J., Elings, M., Zweckhorst, M., et al. (2010). Care farms in the Netherlands: Attractive empowerment-oriented and strengths-based practices in the community. *Health & Place*, 16(3), 423-430.

村瀬雅俊, 村瀬智子 (2020). 大統一生命理論への挑戦, 山極壽一, 村瀬雅俊, 西平直 (編): 未来創成学の展望. 3-79, 京都, ナカニシヤ出版.

笹木弘美 (2016). 地域で暮らす統合失調症の人々が思い描く生活の広がりとそのプロセス. *北海道医療大学看護福祉学部学会誌*, 12(1), 19-33.

渡邊久美, 折山早苗, 國方弘子, 他 (2009). 一般訪問看護師が精神障害に関連して対応困難と感じる事例の実態と支援へのニーズ. *日本看護研究学会雑誌*, 32(2), 85-92.

全国訪問看護事業協会 (2008). 平成 19 年度厚生労働省障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）精神障害者の地域生活支援を推進するための精神科訪問看護ケア技術の標準化と教育およびサービス提供体制のあり方の検討報告書.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

初田真人, 村瀬智子, 非専門職の看護補助者が同行する精神科訪問看護に関する訪問看護師, 非専門職者および利用者の認識, *日本精神保健看護学会誌*, 査読有, 30(1), 66-72, 2021

初田真人, 村瀬智子, 訪問看護ステーションにおける複数名による精神科訪問看護の実施状況, *日本赤十字看護学会誌*, 査読有, 20(1), 109-115, 2020

初田真人, 訪問看護ステーションによる精神科訪問看護における複数名訪問看護の実施状況に関する研究に向けて精神科訪問看護の推進に関連した訪問看護師への聞き取り調査結果を踏まえた検討, *地域ケアリング*, 査読有, 18(4), 56-59, 2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

初田 真人 (HATSUDA Masato)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師
研究者番号：7 0 5 1 2 6 5 6